

以上であるが、慶長年代以降徳川氏が政權を握つて以  
米・儉約令は幕府を勉め、各大小名も類案に發令し、若  
が佐伯藩も極端と思われるまで儉約の布達を出していた  
ので、このお改めを最好の機会として、きびしい監察を  
行なつていたのでないかと考へられる。

(おわり)

探訪記録

佐伯 四國 靈場探訪 (三)

|| 木枯や 無住齋寺の仏たち ||

会員 佐 脇 貫 一

雨に濡れた舗装路、といつてもこぼ米水津海岸、岩  
頭にくだける波しぶきは霧となつて散つてゆく。はるか  
に煙る沖の黒島、どうやら雲も切れて雨もあがつたよう  
だ。

十二番小浦の東林庵を出た小谷君(歌人小谷種一氏)  
と私は、途中葉嶋明神に参詣して帰路についた。佐伯  
靈場道知るべ。にいう。桜の名所浦代坂にはもはや往  
年の姿はなく、二重線の浦代峠新トンネルは内都照明も  
完備して、改修舗装の進んでいる米水津県道とともに、  
大きく現代を呼吸している。旧トンネルを中心に展開し  
た桜の名所浦代峠は、すでに時代カペールにへたてられ  
元越山に連なる尾根の峠の大松も枯れて、祖人によつ  
てつくられた歴史は自然の中に埋没してしまつた。

峠を下りると県道に沿うて原部落、次が岡部落である。  
見よや人木々立ちしげる岡の辺に、恵みの露をうけぬ  
や日ある。歌の文句は幼稚だが、八十八の靈場をめぐ  
る過路の真心を、捧げて祈る詠歌なればと、思わぬ感傷  
におせびながら十三番札所、岡の東光庵を訪れた。

農家造り何の変哲もない庵は、鴨居にかけた枯木の根  
を龍に見立てた飾物と、『真言宗東光庵』の標札だけが  
僧侶の住居であることをしるがたつてゐる。境内に墓地  
があり、新旧十数基の墓塔があるが、刻んだ文字は『○  
院○墓』と浄土宗特有の法名である。

岡部落から農道を南へ進めば中野河内、私たちがこの  
部落を訪れたのは数日後の午後だ。案内も知らぬま  
まに自転車を押し、水立川支流の築堤工事現場を通り、  
中野河内部落に入った。尋ねたがねて山蔭にひっそりと  
静まる十四番靈場松樹寺に到れば、これも農家を改造し  
たような庵である。空曆のこゝろ寺社奉行さつとめ土屋  
亦兵衛の『御領分中寺社記』によると、この庵寺は水立  
山松樹寺という山号、寺号を備えた寺になつてゐる。し  
かしその肩に養賢寺とあるのを見ると、再興された旧  
刹のようで、現在の庵の南台地にある寺屋敷が昔の松  
樹寺の跡ではないかと思ふ。

さて松樹寺の本尊は弥勒菩薩と聞いていたので、庵住  
の人に聞いたが「知らない」という。そこで許しを得て  
仏壇の厨子を開けて見た。古から觀世音菩薩、阿彌陀如  
來、釈迦如來、どこにもある新造の仏像である。若々し  
い童子の顔姿で表現される弥勒像は見当らない。かの松  
樹寺(寺屋敷)は過去において度々火災にあつたと伝え  
るから、ある時代に寺も仏像も烏有に歸したものであ  
らう。未だ未だ失つたこの寺の現状は何か哀切なものに見

えてならぬ。

松樹寺を辞し、小中尾道に出て杖敷部落に向つた。十五番地蔵庵は、畑野浦への果道から約百メートル、無住の小庵だが最近まで人が住んでいたらしい。庵の入口に小型の五輪塔が三十基ばかり積み重ね列べられて石垣代用になつてゐる。どこか付近の山裾から掘り出したものか、放置しては粗末になると、庵寺の境石にしたものだらう。

つるべ落としという晩秋の日足、はや暮れなずむ気配、心急がれる思いで帰途につく。果道を行けば岡山の狩床、ここの金刀比羅社境内には、文化、文政時代佐伯藩の医官で碩学といわれた奥井春耕(二代春耕、名は寛)の碑がある。私に碑文に残る先哲の面影を頭に描きながら、山沿いの道を角道から小島に出た。

次の札所は十六番福蔵寺、所在地は下堅田の津志河内、私の住んでいる部落である。霊場道知るべには『杖敷より角道に出て、それより南山麓を迂回して下堅田村津志河内に至る』としてある。これは小島部落を経て現在の果道津志河内、柏江線を行く道筋らしいが、この案内記の出来た大正六年ごろここは道らしい道はなく、俗に「椎の木鼻」とよばれる山の端を、川岸依いに辿る道があるだけ、順路は小島峠を越える道であつた。村人も旅人もこの峠を越えて善神王宮(玉垂神社)前に出て津志河内部落に入った。

十一月下旬のある日、小谷君の誘いをうけて霊場めぐりを続行した。

妙智山福蔵寺は地下部落の山腹台地にあり、明治、大正の頃までは津志河内、小島兩村の檀那寺であつた。養賢寺末となつたのは享保年間以後で、それまでは龍興山福蔵寺と号して独立した禪寺であつた。私たちが地下中

の旧庄屋屋敷、三股信一氏宅横の参道をのびつた。石段山門、本堂、鐘樓(釣鐘は戦時中供出)、大師堂など境内は整つてゐるが、無住となつた寺庵は荒れるにまかせ、木枯れだけが吹き抜けるようであつた。

この寺は天正十八年日向国三侯院の士で、豊蔭合戦のときこの地にとどまつたという三股基右衛門が、戦いに仆れた同期の後世を弔うため、興月院和尚を嗣基に創建したものと伝えられ、津志河内三股家の氏寺であつた。堅田地及び波越の常楽寺、城村の天徳寺に次ぐ古い寺である。本尊は観世音菩薩、京仏師の手になる名作といわれる。札所は境内の一隅にある大師堂、開基興月庵和尚の墓(無縁塔)は本堂背後の墓地にある。

これほどの由緒をもつ寺が無住になつたことを惜しむながら柏江を目指した。

地下部落の只ずれに『経石さま』とよばれる一基の石塔がある。大乗妙典一石一宇塔で、元文三年五月の造立銘文と偈は養賢寺十世匡山座元、願主は津志河内の住沙弥善信。この津志河内村は柏江村とともに天領(幕府領)堅田九カ村のうち、佐伯藩の支配地ではなかつた。享保元年のころは八代將軍吉宗の治世であつたが、日本の宿命ともいえる台風禍は連年のように國中のどこかを襲つた。佐伯地方は享保六、七、九、十四年、元文二、三、四年と、藩記録に特筆されるような大災害をうけたが、元文二年九月四日の大暴風はとくに堅田川流域の氾濫となり、津志河内部落は洪水のため民家が流失、溺死者まで出た。この年は六月、七月に旱天が続き、ついで九月に水害、その上蝗が発生して收穫皆無にひといとい最悪の状態だつた。沙弥善信は飢饉に直面した村人の苦悩を救い、やがて来る年の豊作を祈念するため、大乗妙經一石一字の筆写を飛願、この石塔を造立した。星霜二百

三十余年、石は毀ち銘傷の文字は磨滅したが、願主沙弥の真心は。経石さまの祭り。として、いままなお部落の年中行事に残っている。

津志河内から柏江に行く道は昔も今も変らなない。広い水田地帯をよぎり、堅田川にせまる山の端をまわれば柏江の部落になる。

十七番霊場金剛山江国寺は部落の西端にあり、堅田郷では最大の禅院である。山門は天領時代の代官所門といわれ、どう見ても寺にふさわしくない武家門、庫裡にも武家座敷めいたものがある。本堂、葉師堂、観音堂、鐘樓など清掃のゆきとどいた境内は清々しい。

札所は観音堂にあり、ここはまた西国三十三ヶ所霊場の九番の札所でもある。そのとき私は法師水願経にある『かの仏の国土は一向清浄にして、女人の形なく、諸々の敬悪をはなれ、また一切の悪道の苦しみをなす』という章句を思い浮かべた。

本堂裏山の墓地は、森九郎左衛門尉吉安の墓塔がある。吉安は佐田藩祖毛利高政の異母弟で、兄高政に従って戦場を馳駆し、まを高政を助けて佐田藩の基礎を固めた陰の人である。柏江、津志河内、塩月、泥谷、波越、石打、西野、府坂、桐野の九ヶ村は、高政が吉安に与えた領地（赤木村四百石と共に二千石余）であった。寛永九年十一月家督争いに敗れた吉安は佐田を去り、領地二千石を幕府に返上し、蔵米取りの直参旗本になつたが、寛永十七年四月江戸で病没した。吉安の死を聞いた柏江の村民は旧領主の恩顧を思い、天領代官に乞うて野中の吉安館を浄地に移して寺庵とし、その境域に供養墓塔を建立したが、万治元年槐川和尚を招じて副基とし一寺を創建、金剛山江国寺と号したという。へ吉安の法名は江国寺殿秀山宗才大居士。

その昔柏江の港といわれたこの村は、天領地内で生産される米、木炭などの集荷、積出港で数軒の回船問屋があり、港街として繁栄した。時代の変遷によつて港の機能は失われ、明治、大正期を境に一分の農村となり現在に及んだが、いままた堅田川の河川改修事業によつて往時の姿を一度させた。堤防上を走る県道は鋪装され、城郭のような石垣上にあつた江国寺は、県道に沿う一禅寺になつた。昔ながらのものとして江国寺の西、道端にある芭蕉の句碑だけ、『古池や』の万葉假名がわびしい。

(おわり)

資料

佐田と国木田独歩 (5)

「寛永・尾間日記」に見る独歩の動き

会員 山本 保

鶴谷学館生徒富永徳磨、尾間朝の日記を左に掲げます。独歩排斥運動の模様や、上京しようとする師弟の動きを捉えることができます。

明治二十七年二月十日（以下 富永日記）

杣にもたれ、昨日の日誌をよみつつある間に国木田師（独歩）は訪ひ来りぬ。急ぎ取片づけて迎へて書斎に入りぬ。

師は問うて曰く、芳島（向島）に山本篤吉なる人ありやるやと。我知らずと云ひしかば師は苦笑して曰く。